

はじめに

本書は「医療・福祉における地域・住民エンパワメントプロジェクト (Citizen& Community Empowerment in Health and Social Care Project, CEHSOC Project)」の定例研究会における報告をまとめたものであり、昨年発行した『医療・福祉における地域・住民エンパワメント—実践編—』に続くものである。

本書に収録した3つの研究会の内容は、それぞれ今日の医療において医療サービスの利用者と医療従事者が共通して遭遇している問題を扱っており、それを何らかの実際的なアプローチによって解決しようとしている。板井孝壺氏は、哲学者による倫理コンサルテーションの経験とそこでの課題を述べられ、また田中祐次氏は御自身の医師としての臨床経験や患者支援活動の中から、患者の暗黙知を形式化し、さらに集合知としていく取り組みを推進されている。松島京・小嶋理恵子両氏は、出産という出来事において、新しい家族を迎える男性を支える助産師の実践活動について報告されている。

これらの活動は、今日の医療システムの中では重要な課題であるにも関わらず相対的に取り組みが弱い場面に関するものであり、一つの新しい取り組み（イノベーション）についての報告といってもよい。こうした取り組みをどのように医療組織や医療制度の問題として引き取って議論していくかについては、また別のところで議論される必要があろう。

本書におさめられた2つの研究会（第8回、第9回）は、プロジェクトの一員である小嶋理恵子さん（宮崎大学医学部看護学科小児・母性看護学講座）の尽力がなかったら実現しなかった。また、プロジェクトのコーディネーター、定例研究会の運営、本書の編集をすすめてくれた棟居徳子さん（人間科学研究所ポスドクトラルフェロー）、研究会・編集実務を手伝ってくれた清水誓子さん、新山智基さんには、この場を借りてお礼を申し上げます。最後に、本プロジェクトの活動資金を提供していただいている日本生活協同組合連合会医療部に深謝いたします。

立命館大学産業社会学部教授・人間科学研究所運営委員
松田亮三